

祝祭日には国旗を掲揚しましょう

敬神尊皇 黎



明報恩感謝

監修/日刊ひぐらし 〒151-0071東京都渋谷区本町1-30-18-107 <http://www.higurashi.net/> 第0013号
護國青年會議 <http://www.gokoku.net/> 発行人/山本修三 編集人/戸出蒼流 平成17年5月28日



【祝 日本海海戦大勝利 100周年】



日本海海戦の圧倒的勝利は、我国の自存自衛を全うし、国際社会に於ける日本の地位を高め、今日に至る繁栄の礎を築いた戦いであり、日本の勝利は世界を驚嘆せしめた。「ああ、これは何たる大勝利なのか、陸戦においても、海戦においても、未だ嘗て、このような完全な大勝利を見たことも聞いたこともない。実にこの海戦は、トラファルガー海戦と比較しても、その規模は遥かに大である」これは英国の戦史家、H・W・ウィルソンの言葉である。日本の連合艦隊が、世界に名だたるロシアのバルチック艦隊を壊滅させたのは、江戸幕府が鎖国政策を廃止し、開国への第一歩を踏み出してから僅か50年後のことであった。

日露戦争は、超大国帝政ロシアの極東侵略に対して、無名の小国に過ぎなかった日本が国家の総力を挙げて戦い、島国日本の実力と存在を全世界に知らしめ、ロシアのみならず欧米のアジア侵略政策の見直しを余儀なくさせた戦いであった。帝政ロシアは、18世紀前半までにアジア北方地域の占拠を終え、南下を開始した。1875年にはサハリンの占有を果たし、ウラジオストックに海軍の根拠地を築いた。しかし、この軍港は冬季には凍結するので、ロシアは不凍港を求めての南下を画策していた。1895年(明治28年)、日清講和条約で遼東半島が日本に割譲されることになるや否や、ロシアは武力を背景に独・仏とともに条約に干渉し、日本に対する圧力を強め同半島の清国返還を強要し、返還させた同半島の旅順・大連を租借せしめた。念願の不凍港を手に入れたロシアは、この地を本土と直結する強力な根拠地とした。更に満州の領土化を策するとともに、南下を進めて触手を朝鮮半島に伸ばし、やがては日本にまで、その魔手を伸ばそうと企んでいた。ロシアの脅威に対して、日本は明治35年(1902年)、日英同盟を結んだが、軍事力に物を言わせるロシアは、日本の抗議や談判には耳も貸さず、兵力を増強して日本への圧力を強化した。このままでは、アジア諸国はおろか日本の存続そのものが危うくなる、なんとかしてでも横暴ロシアを排除しなければならないと、遂に明治37年(1904年)2月6日、止むに止まれず国交断絶を通告し、2月9日宣戦が布告され日露戦争が始まったのである。



東郷平八郎司令長官(中央)



旗艦・三笠

明治38年(1905年)5月27日未明、ロジェストウェンスキー中将率いるロシアのバルチック艦隊が西対馬海峡に現れた。午前9時40分、哨戒艦からの報告を受けた東郷平八郎連合艦隊司令長官は、「敵艦見ユトノ警報二接シ、連合艦隊八直チ二出動コレヲ撃滅セントス。本日天気晴朗ナレド波高シ」と打電させ、旗艦三笠を率いて出撃した。午後1時55分「皇国ノ興廃此ノ一戦ニ在リ、各員一層奮励努力セヨ」のZ旗信号を揚げ全軍の士気を鼓舞した。バルチック艦隊との距離が8千メートルになった時、東郷司令長官は取り舵一杯を命令し敵艦隊に接近した。これが有名な東郷ターンである。ロシア艦隊は好機到来とばかりに砲撃を開始したが味方が邪魔になり、我が艦隊に被害が及ぶことはなかった。午後2時11分、彼我の距離が6500メートルになった時、東郷長官は砲撃を命じた。戦力においては圧倒的不利でありながら、巧みな戦術と、祖国の命運を担った我が勇者達の砲撃により、敵軍は右往左往するばかりであった。数時間に及ぶ激しい戦闘が続き、敵の司令長官ロジェストウェンスキーも重傷を負い、夜陰に乗じて、ウラジオストックに逃げ込もうとするが、我が夜戦部隊は、波濤逆巻く中、壮絶な魚雷攻撃を真夜中まで敢行した。明けて28日、逃げる残存部隊もたちまち発見包囲され、白旗を揚げ敵の長官以下が捕虜となった。この海戦は世界史上、稀な完全勝利であった。司令長官・東郷平八郎、主席参謀・秋山真之の指揮の下、大勝利を収めた日本海海戦は、日露戦争を勝利に導き、日本に平和を齎したのである。

日露戦争は、欧米の圧倒的な植民地化の波が、中国大陸や朝鮮半島に迫る中、アジア防衛のために敢然と立ち上がった日本が、有色人種として初めて白色人種に敗北を味合わせたのである。日本の勝利を機に高まったアジア・アフリカ・アラブでの民族独立運動は、ロシアの圧政に苦しむフィンランドやポーランドなどの独立、トルコ革命、そして米国での人種差別撤回運動へと連動していった。アジアの盾となって超大国に果敢に立ち向かった先達に思いを寄せる時、私たちは、日本人としての矜持を忘れずに、祖国日本が世界に冠たる国家となるよう精進しなければならないと考える。

編集人/戸出蒼流